

ブラック・ジャパン

赤瀬川 隼



新潮社

ノブノ・ジャパン

赤瀬川 隼



新潮社

著者紹介

1931年、三重県四日市市生まれ。大分第一高校卒業。
住友銀行、テック（言語教育）等を経て、現在フリー。
著書は『映画館を出ると焼跡だった』（草思社）、『球は
転々宇宙間』（文藝春秋）、『消えた外套』（講談社）、『影の
プレイヤー』（文藝春秋）、『潮もかなひぬ』（文藝春秋）等。

ブラック・ジャパン

著者／赤瀬川隼（あかせがわしゅん）

●

印刷／昭和60年9月10日

発行／昭和60年9月15日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

●

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

●

定価／1000円

© Shun Akasegawa, Printed in Japan, 1985

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-359401-2 C0093



目次

ブラック・ジャパン

5

無名の日

49

日出ずる国のトポフ君

97

草の上のボート

149

ホモ・アピアランス

185

装帧／平松尚樹

ブ
ラ
ッ
ク
・
ジ
ャ
パ
ン

ブ
ラ
ッ
ク
・
ジ
ャ
パ
ン

一

十万人のざわめきが、一挙にどよめきと歓声に変わった。メイン・スタジアムのゲートにトッ
プ・ランナーの姿がスイと現われたのだ。黒人である。上体の左右の揺れもなく、足どりも坦々
として乱れない。西に傾き始めた陽光を浴びて、黒褐色の肌にかすかに滲んだ汗が妖しく美し
く光っている。

スタジアムの大歓声のなかから、一つの声の束が生まれた。

「オスカー！」とも聞こえ、「ハスカル！」ともとれる。それが連呼となった。どこの国の選手
だろう。四年まえのロサンゼルスオリンピックのマラソンでは、タンザニアのイカンガーやケ
ニアのヌザウ、それにジブチのロブレールが六、七、八位と健闘したが、この男もアフリカ勢だろ
うか。それともアメリカの選手だろうか。

スタンドの歓声が、さらにもう一廻り大きくなった。五十メートルほど遅れて二位のランナー
が姿を現わしたのだ。今度ははつきり東洋人とわかる。声援の大きさからすると地元^{地元}の韓国か。
それとも日本人か。あるいは中国の選手か。

その姿が見えるとともに新しい声の束が生まれ、これも連呼となった。

「タキー！」か、「タキイ！」か。どうも日本人の姓のようである。先を走る黒人の坦々とした走り方にくらべると上体の揺れが大きく、疲労とも見えるし、また何とかして一位をとらえようとする気魄の現われとも見える。しかし二者の距離は、いまのところ目に見えて縮まりも開きもしていない。

大観衆がこのトラック上の死闘に熱狂し始めたころ、さらにもう一人の男の姿が二位に百メートルほど遅れて現われた。これは白人である。マラソンのランナーにしては長めの金髪がうしろへうしろへとなびき、白い肌が充血していちごミルクのような色を帯びている。長身でストライドが力強い。ピッチを上げて二位との差を詰め始めた。これはどこの国だろう。

三つめの連呼がスタンドから湧き起こった。はっきり「サローネン！」と聞こえる。フィンランドだろう。

ソウル・オリンピックの掉尾を飾る男子マラソンが、最後の最後になって願ってもないスリリングな展開になり、スタジアム全体が、火にかけられた巨大な鍋のようにたぎり立った。百五十メートルたらずの間隔に三人のランナー、しかも、黒人と東洋人と白人である。

ユーラシア大陸東北部の美しい半島の秋、抜けるような青空のもと澄み渡った大気を、三種類の連呼が鋭く貫き、まじり、たかまる。

一位と二位、二位と三位の差が縮まる。ジリ、ジリと縮まる。十万人の興奮は極に達している。旗が打ち振られている。

見ると大きく揺れている旗は三種類である。スターズ・アンド・ストライプス、日の丸、それ

に白地に青十字のフィンランドの旗だ。してみるとやっぱり、トップを走る黒人はアメリカ、二位を行く東洋人は日本だったのだ。

トップがゴールまであと百メートルほどになったところで、三位のサローネンがダッシュをかけた。二位のタキイも負けてはいない。トップのオスカーに五メートルと迫る。三者の距離は二十メートルたらずとなる。スタンド全体が絶叫また絶叫。

ついにテープが切られた。オスカーが逃げ切った。手を伸ばせば彼の背中に届くような差で、タキイが続いてゴールを走り抜けた。それから三秒遅れてサローネンが入る。そのときようやく、四位の選手の姿がゲートに現われた。

スタンドの絶叫は余韻に変わった。旗の波も静かになった。しかし、たくさん目の丸だけは衰えることなく、熱狂的に打ち振られ続けた。優勝を逸したとはいえ、間髪まで追い上げて二位となったタキイへの賞讃であろう。優勝タイムは二時間五分四八秒、この記録をはじめ、二位と三位まで世界最高記録、オリンピック最高記録となった。百メートル、二百メートル、四百メートルリレーなど、短距離の王者アメリカは、ついに同時に男子マラソンの金メダルをも掌中に収めたか。

ところが、電光掲示板の一位には「ASUKA・JPN」と出たではないか。そして二位に「TAKEI・USA」の文字がある。オスカーと聞こえたのはアスカだったとして、一体、一位の黒人が日本人で、二位の東洋人がアメリカ人だったとは。そんなはずはない。きっと電光掲示板のJPNとUSAを入れまちがえたのだろう。

しかし、それに注目する十万人のなかから、掲示板がまちがっていると言い出す人は一人もい

なかった。そして日の丸の大旗小旗はいつまでも打ち振られ続けた。

もちろん掲示板の表示は正しかった。優勝した飛鳥^{あすか}太郎は日本人、二位に入ったハープ・タキはアメリカ人である。

「ピート。南アフリカ共和国とは別の意味で、おれたちは日本のやり方を問題にしていんじゃないかな」

「ジェシー。きみがパラドックスの駆使に自信があるならやればいいだろう。おれはあきらめた」

「きみらしくないな。あいつら、太平洋の端っこの黄色い金持は、黒い金メダルを四つも取ったんだぞ」

「いいか、ジェシー。おれたちアメリカが、オリンピック史上、黒い金メダルをいくつ取ったと思う」

「――」

「いくつかは別にしてだな、日本の連中は二十四年まえに、自分たちの首都東京で、おれたち白い金持の黒い金メダルをいくつも目撃したわけだ。男子百メートルのヘイズ、二百メートルのカー」

「女子百メートルのタイアス、二百メートルのマガイアー」

「そのとおり。マラソンはうちではなかったが、やはり黒いアベベだった。そして四年まえのロスでは、短距離は例のルイスだ。女子だってそうだろ。アシユフォード以下、黒い金メダルのラッシュだった」

「しかしな、ピート。うちの黒い連中はな、何代もまえからアメリカに住んでいるんだぞ。くらべものにならんよ」

「しかし、その何代もまえの祖先たちは、どういう手段でアメリカに連れてこられたんだ。それにくらべて日本は奴隷船を持つてはいない」

「ピート。きみはいつから歴史主義者になったんだ」

「ジェシー。きみとこんなことを言い合うなんて、もううんざりだよ。それに、そんなひまはないんだ。ここをどこだと思う」

「どうやらソウル・オリンピックのプレス・センターのようだな」

「それがわかつているのなら、さあ、仕事をしようぜ」

「わかつてる。お互い給料生活者だからな。おい、ピート。モニター・テレビを見ろよ。日本の黒い宝石だぜ」

「うむ、美しい」

日本の黒い宝石とは？ それはいましがた男子マラソンに優勝した飛鳥太郎のことではなかった。プレス・センターのモニター・テレビに映っているのは、日本選手団の占めるスタンドの一角に並ぶ、三人の女だった。そして彼女たちがすでに三つの金メダルを獲得しており、ジェシーの言ったとおり、飛鳥の優勝によって日本の黒い金メダルは四つになったのだった。

「エミリー。テレビに映されてるわよ」

「わかつてるわ、ジョージア。アメリカのABC放送って、しつこいわね」

小寺嬢慈亜、乙村恵美理、尾形真瑠雅麗多、この三人の美しいファースト・ネームの頭文字を

つなげると、GEM——宝石となる。

彼女たちは、このオリンピックピックの前半のスケジュールですでに自分たちのプレーを終え、その後は悠々と他の競技を見物してきたのである。

その彼女たちのプレーとは——

尾形真瑠雅麗多・陸上女子百メートル優勝、乙村恵美理・同女子二百メートル優勝、小寺嬢慈亜は女子百メートル二位のほか、この二人と山本加代子の四人で女子四百メートルリレーに優勝、いずれも世界新記録による金メダルだった。山本加代子以外はすべて黒い肌の持主である。

男子を含めて陸上の短距離といえ、それまでは日本が優勝するなどおそろえない種目だった。優勝はおろか入賞さえむつかしいとされてきた。ところが、女子陸上の短距離の代表的三種目を日本が制覇したのだから、世界中が驚いてしまった。しかしすぐに、とまどいと疑問のほうに驚きを上廻るようになった。胸に小さな日の丸のマークをつけてテープを切ったのは、いずれも黒人だったのだから。そしていま、男子長距離の花であるマラソンにも、黒い日本人が一着でゴールインしたのである。

まず女子百メートルの決勝で、真瑠雅麗多と嬢慈亜がアメリカ代表の黒人選手をおさえて一、二着で走り込み、二百メートルで恵美理が同じくアメリカの黒人選手に勝って優勝したとき、さつきピートと会話を交わしていたアメリカの新聞記者ジェシーは、本社につきのように書き送った。

「日本、金で黒い宝石を買い、金メダル二と銀メダル一を強奪」

さらに、四百メートルリレーでもアメリカが日本に負けて二位になると、ジェシーはタイブラ

イターが壊れるような勢で顔を真っ赤にしてキーを叩いた。

「黄色い金持、経済摩擦の次は人種摩擦」

さて、最終日の今日、ジェシーは新しいタイプライターに向かってどうということばを打ち叩くことだろう。

「IOCは日本の国籍法をチェックすべし」

か。しかし多分彼はそうやりかけて、日本の国籍法も自国の国籍法もいままで詳しく調べたことがないことに気付き、表現を訂正するかも知れない。

「アメリカで育ったマルガレータとジョージアの金銀はアメリカのものである。ケニアで育ったエミリーの金はケニアのもの、そしてタンザニア生まれのアスカルの金はタンザニアのものである。日本はメダルを返還すべし」

一方、最前列にG.E.M.が並んで腰をおろしている日本の選手団席のうしろのほうでは、日本オリンピック委員会の二人の男が、ぼそぼそとした会話を交わしていた。

「日本は勝ったんだな」

「そう、日本は勝った」

「喜んでいいんだろうな」

「きみが飛鳥太郎と同じ日本人ならね」

「頭のなかではそうだ」

「それでいいじゃないか」

「しかし、いま目のまえで展開された劇的なレースは、何というか……」

「ふむ、日本の滝がアメリカのアスカルに惜敗したと言いたいんだろう」

「うん、そんな感じだな。どう見てもタキは日本人だし」

「アスカルはどう見ても非日本人というわけか」

「そう。それで振られていた旗は星条旗と日の丸」

「それだけならわりあい簡単だが、実は飛鳥はアメリカとはまったく関係がなく、タンザニアと
きてる」

「ますます頭が、いや感覚がこんがらがってきた」

「とにかく男子マラソンは日本の優勝だよ。どこから見ても正当に勝ったんだ」

プレス・セクターでは、頭にきていたジェシーがタイプを叩き始めた。

「五十二年まえ、孫基禎^{ソンギジョン}という優れたランナーがベルリン・オリンピックでマラソンに優勝した。
このとき、二位のイギリスのハーバーに続いて三位を占めたのは、南昇龍^{ナムスンリョウ}というランナーだった。
孫と南の二人のランニングシャツには日の丸があり、表彰式では二本の日の丸が上がり日本国歌
が奏されたが、この二人は厳密には日本人ではなかった。二人とも、当時日本の植民地統治を受
けていた朝鮮の人間だったのだ。そしてたつたいま、その二人の祖国で開かれたオリンピックの
男子マラソンで、日本は今度はアスカルというタンザニア出身の若者の胸に日の丸をつけて走ら
せ優勝した。二位に入った日系アメリカ人のハーブ・タキは明らかにわが合衆国の市民であるの
に対し、アスカルが厳密に日本の市民であることの信憑性^{しんぴやうせい}は薄い。しかしまもなく、メインボー
ルに五十二年まえのように日の丸の旗が上がり、日本国歌がスタジアムに響くことは残念ながら